

Title	郡山市七ツ池の二彩釉出土遺蹟に就いて
Sub Title	On the discovery of the glazed pottery in two colours (white and green) at Nanatsuike, Koriyama city, Fukushima prefecture
Author	江坂, 輝彌(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1951
Jtitle	史学 Vol.25, No.1 (1951. 7) ,p.101- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19510700-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

郡山市七ツ池の二彩釉出土遺蹟に就いて

江 坂 輝 彌

序 塾史學科考古學研究室に於て、その發掘調査を決定した福島縣相馬郡眞野村古墳群豫備調査の歸途、發掘調査に關する打合せの爲、福島縣廳社會教育課へ縣史蹟名勝天然紀念物調査係主事、梅宮茂氏を訪問、その折り縣立圖書館保管の縣内出土の先史、原史時代遺物を一覽し、梅宮氏より郡山市小原田町、圓壽寺にも郡山近傍の出土遺物が多數收藏されているから歸途見學をされてはとのことであり、昭和二三年一〇月一七日、清水潤三氏と共に圓壽寺に立寄つた。

圓壽寺に郡山附近の遺物が多數蒐集されていることは豫ねてより聞いていたところで、既に先輩西岡秀雄氏等が來訪され、本寺所藏の遺物の一部を發表されたこともあつたが、現圓壽寺住職新國西新氏は先代西賞氏の志を嗣ぎ、幼少より附近出土の遺物の蒐集に努められ、新石器時代の遺物を始め、古瓦類に至るまで非常に多くの考古學資料を蒐集されている。而して同日清水氏と共にこれ等の遺物を短時間に於て一覽させていただき、その折り殆ど完形の唐三彩的手法をもつてつくられた二彩釉水瓶を一個所藏されているのを拜見、この二彩釉の出土位置をお尋ねしたところ近隣の七ツ池出土とのことで、又出土状態、遺蹟の現状等についても詳細を伺うことが出來、同日は寫眞を撮影、實測をなし、伴出土器等を一覽して郡山より平方面を經由して歸京の途についた。

歸京後松本信廣教授、藤田亮策講師等にこの發見を御報告し、其後同寺より二彩釉水瓶及び伴出黒漆塗香爐型瓦器等を塾研究室へ借用し、梅原末治博士、小山富士夫氏等にも見ていただき、その重要性が増々認識されるに至つたので、昭和二三年六月二六日二七日の兩日、セツ池二彩釉出土地區の發掘調査を実施することとなり塾より藤田亮策講師、清水潤三助手、史學科學生堀越精一郎及び筆者が參加、縣より梅宮茂氏が參加された。

而して本遺蹟出土遺物の調査に終始たづさわつた筆者がその責任上本遺蹟の調査概要を報告することとなり、本誌上に公表した次第である。

猶筆者は日本新石器時代文化の研究に専念するものであり、この方面に對する知識は極めて乏しく、セツ池遺蹟の調査事實を忠實に報告するにとまり、廣く考證し論究することの出来ないことを實に遺憾とするところである。

猶本調査に際し、終始御協力を給り、六月二五日より二八日のセツ池調査期間中宿泊の便宜を與えられた圓壽寺住職新國西新氏、發掘調査に協力された鈴木幸雄氏以下郡山商業高等學校生徒諸君、又調査に種々便宜を與えられた縣當局、ことに梅宮茂氏、又發掘調査を快諾された耕作者遠藤己三治氏、佐藤平作氏等地元の各位に對し本稿執筆にあたり衷心謝意を表するものである。

發掘調査に至るまで

本概報の先ず最初に新國氏が如何なる動機にてこれ等の一括遺物を收藏されたものであるか、開墾により偶然發掘された時より記述をなすこととする。

新國氏の語られるところによれば昭和一三年一月二四日、圓壽寺の門前に住む檀家の老人が來訪し、新國氏の愛好

するかわらけが七ツ池の新開墾地に多數掘り出され、完形の瓶、皿等も散亂しているから、早く採集に行かれると良いとの報知を得、近傍の地のことではあり、早速開墾地えゆかれたところ、須惠器大甕の大破片が心無きものにより微塵に碎かれ、又白黄色の上釉の上に緑色の上釉をまだらにかけた發掘された折りには完形であつたと思われる瓶形の陶器の如きもので數片に破碎されて開墾地の一隅に投棄されたもの、その外須惠器瓶、蓋付杯、土師器杯、黒色に磨研された香爐型の瓦器等が散亂して居り、これ等を丹念に採集され、寺え持ち歸られた。

白黄色と緑色の上釉のかゝつた瓶形の陶器は復原されると殆ど完形のものとなつた。そしてこの陶器が正倉院御物中にある唐三彩の古陶に近似する様に思われ、古代の貴重な遺物の様に考えられたので、今日まで大切に保管され、誰か識者が寺を來訪したら見てもらいたいと考えて居られたが、昭和一三年頃まで同寺へ屢々來訪され、同寺所藏の古瓦類を調査された内藤政恒氏も其後來訪されること無く、其後戦局多端となり、中央より福島方面へ調査旅行に歩かれる人も無く、今日までにこの水瓶を見られた方は縣史蹟名勝天然紀念物調査委員、故堀江繁太郎翁等縣下の一部識者に限られた如くであり、昭和二三年一〇月一七日筆者等がこれを拜見し、實測撮影をなし、歸京後その寫眞の焼付の一枚を筆者の學友である民間情報教育局勤務の荻田朝雄氏に惠與したところ、荻田氏より根津美術館の滿岡忠成氏に、滿岡氏より國立博物館國寶調査課の田澤金吾、小山富士夫氏等に報知されるところとなり、又京都大學の梅原末治博士も多大な關心を寄せられ、一躍學界の話題の一焦點となつた。

而して筆者は福島縣下え出張の途次、數回圓壽寺に至り種々調査をなし、又六月二六日發掘調査後、發掘地隣地に住

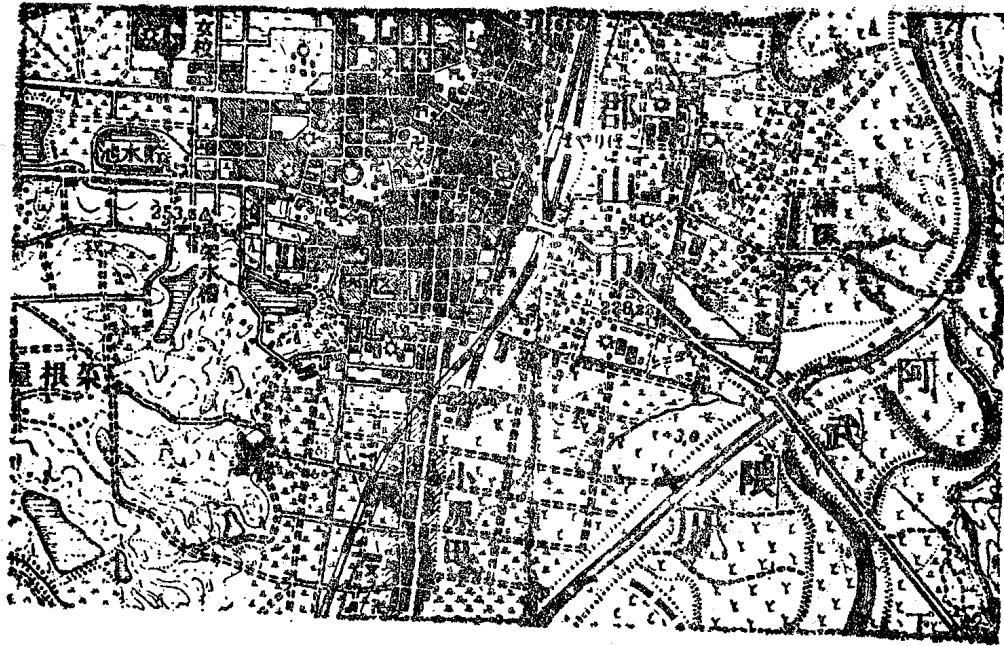
まわれる佐藤平作氏に昭和一三年秋の開墾者は誰れであるか御尋ねしたところ、現地主遠藤虎造氏とのこと、早速遠藤氏宅に伺つたところ、遠藤氏は自身開墾はされたが前記二彩釉水瓶始め多くの土器類は、その折り手傳いに來ていた郡山市名倉に住む島崎菊次氏が松の根を掘り起し中に一ヶ所より發掘したものであり、埋没状態等は私には判らないとのことであり、遠藤氏宅を辭し、その儘名倉の島崎氏宅を訪問した。

幸い島崎氏が在宅され、出土状態を伺うと、昭和一三年一月末、遠藤虎造氏所有の字七ツ池の東斜面の松林を開墾することになり、斜面の傾斜に沿つて數段の段畑になる様に開墾を始め、島崎氏は斜面下部の佐藤氏宅裏の松根を掘り起し中、殆どの地域では二・三〇糎の深さにて基盤をなす砂質凝灰炭層に達したが、或一ヶ所の松根附近は約一米餘の深さまで黒土層が落ち込み、その松根の附近を發掘してゆくと四、五〇糎四方ぐらゐの場所に雜然と各所より須惠器大甕の破片、杯形須惠器、土師器、瓶形須惠器、香爐形黑色磨研瓦器等出土し、その中に二彩釉水瓶が横臥して埋没されていたと云う、この瓶は緑色の釉もかけられて居り、この中に何か入つてゐるように思われたので、開墾鋏で割つてみたが、中は砂土のみであつたので其場に放置して歸つたと話され、その折り小學生が來て須惠器の大甕の大破片を面白がつて踏み碎いて行つたとのことであつた。

以上の聞込により今日圓壽寺に收藏されるまでの經過と出土状況の大略を察知することが出來たのは幸であつた。

遺蹟の位置

遺蹟は阿武隈川左岸、郡山盆地西側の低平な臺地の東端部の阿武隈沖積低地を直下に望む位置にあり、遺蹟地南面小



第一圖 遺蹟附近五萬分ノ一地形圖×印ガ遺住

支谷に小さな沼地があり、これが七ツ池の一つであると云われて居り、この臺地の東斜面を開析する幾つかの小支谷に各々沼澤地があり七ヶ所程所在したと云うところより七ツ池の地名が生れ、この附近の字を七ツ池と云う。

七ツ池遺蹟は東北本線を郡山驛で下車、陸羽街道を白河方面へと南へ約二軒、郡山市小原田町方向へ進み、東北本線の踏切を通過、仙臺鐵道局郡山工機部の前を通り、圓壽寺の手前を右へ曲り、圓壽寺の北側を西方へ一〇〇米餘歩くと再び東北本線の踏切を越え、それより約五〇〇米にして、松樹茂る低平な臺地に至る。この附近が字七ツ池の地で、遺蹟は道路が臺地に接したところを臺地に沿つて南へ曲つた、松林南側の東南斜面の畑地で、佐藤平作氏裏口に通ずる道路の上の畑地である。(第一圖×印の地點が遺蹟)

行政區劃は福島縣郡山市小原田町字七ツ池一二九番地である。

發掘の結果

昭和二三年六月二六日前記郡山商業高等學校鈴木幸雄教官以下生徒諸君の應援を得て、昭和一三年發掘當時の現状を知られる佐藤平作氏の教示により、臺地北側松林より佐藤氏宅裏口に至る道路の宅地と松林の中間附近斜面上部畑地を斜面上部に向つて幅一米五〇、長さ五米を發掘するも、殆どの地域に於て深さ約三〇糎にして凝灰岩質の基盤に達し、土師器小破片が若干出土したが、それ等と共に近代の陶磁器破片も出土して居り、この地域は既に全く攪亂されていることを確認した。

而してこの發掘溝の東南部が南斜面に沿つて溝狀に深く落ち込んでいる如くみられた爲、發掘區を東南部に擴張したところ、約二、三〇糎にして凝灰岩崩壞土壌の下に有機質黑色土層が五、六〇糎の深さに堆積し、この黑色土層中より内部に黑色漆を塗布した土師器皿形土器破片、圓壽寺に所藏される昭和一三年に既發見須惠器經筒底部破片に接着する經筒底部殘缺等が最近の鐵線、鐵屑等と共に埋没しているのを發掘した。而してこの黒土層は最近に於て底面まで攪亂されたものであることを認めると共に、昭和一三年一月この地區附近より二彩釉水瓶等が發掘されたと想定して誤りないと思われるに至つたので、今回の調査目的を一應達することを得たので發掘は二六日一日で中止した。

遺 物

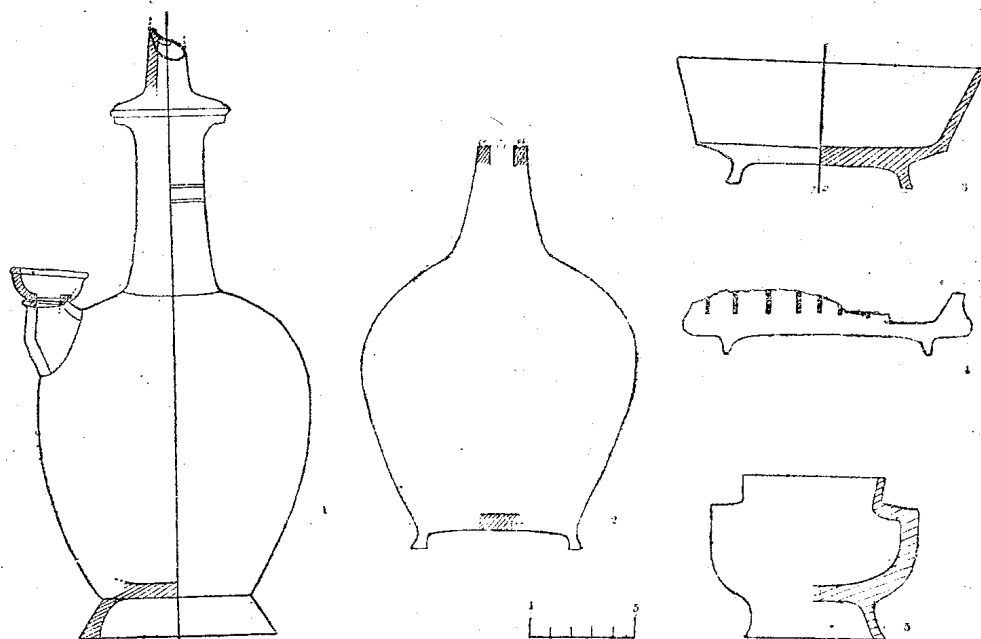
本報告に於て記載する遺物のその殆んどは昭和一三年一月二三日の開墾の際の出土遺物であつて、これ等は當時新國氏が丹念に採集して持ち歸られ復原し得るものは復原され保存されているものである。

二彩釉水瓶、高さ二九糎、胴部最大幅一三糎、底徑九、五糎の大きさのもので、底部には高さ約一糎の外に反つた高臺が附されている。

粘土質は他の須惠器に類似するが地肌は多少白味を帯びている。而して底面を除く表面全面に涉つて白味を帯びた黄釉がかけられ、この上に上部より流した様に綠釉がかけられ、口唇部より口頸部には綠釉が一面にかけられているが、肩部以下の胴部には流れる様に斑にかけられ、下にかけてられた黄釉が不整楕圓形に散在露出し、施釉の方法は全く唐三彩の技法に依つてゐる。しかし長期間土中にあつた爲か、大陸の唐代に於ける三彩の如く艶やかな黄釉、綠釉ではなく、同じ土中にあり發掘品として著名な大津京址發見の二彩釉に比較しても、見劣りのする色あせた田舎作の感深いものであつた。又三彩にあるべき褐釉は使用された痕跡なく、技法に於ては唐三彩の施釉技術に一致するものであるが、正しくは二彩の名稱をもつて呼ぶべきものであらう。

又この水瓶の肩部には六角の注口が付き、注口唇部は一段厚く圓形をなしている。又口頸部には二條の平行沈線が底部に平行に施丈され、その上部に圓形鐔狀の突帯を環らし、この上數糎にして口唇部に達するものと思われるが、口唇部を全く缺く爲、明言出来ないことは甚だ遺憾である。(第二圖1)

香爐形瓦器 全面に黒漆と考えられるものが塗布され、全面黝黒色に磨研され、一見大陸出土の黒陶の感あり、粘土質は須惠器の如く焼成硬質でなく瓦器の如く思われるが、筆者寡聞にして斯く如き土器の出土類例を全く知らないが、後藤守一氏の言に依れば鎌倉附近のやぐらと稱する鎌倉時代岩窟墳墓より發見例があるとのことであつた。大きさは口



第二圖

徑約六糎、高さ約八糎である。(第二圖5)

須惠器水瓶 前記二彩釉水瓶と殆ど同形のもので、底部に高臺を持つものであるが、注口及び口頸部に圓形鐔狀突帶、沈線文等は缺き、何等裝飾を持たない實用的素文のものである。大きさは高さ約一九、五糎、最大幅一三糎底徑八・二糎であつた。(第二圖2)

須惠器經筒底部破片 底徑約一〇糎にして周邊部より約二糎内側底面に高さ約五糎の高臺があり、又胴部下半底部に近き破片であるが、圓筒部の四面に口縁部より底部へと全面に一定の間隔に縦に數條の沈線文が施文されている様に見られ、底面近くの一部に徑一二糎前後の透彫せる孔が存在した。(第二圖4)

又今回この經筒の底部破片の缺失部の一部が發掘區の攪亂された土層中に於て發掘された。

其他の土器、其他圓壽寺に所藏されるものとしては以上の遺物が一



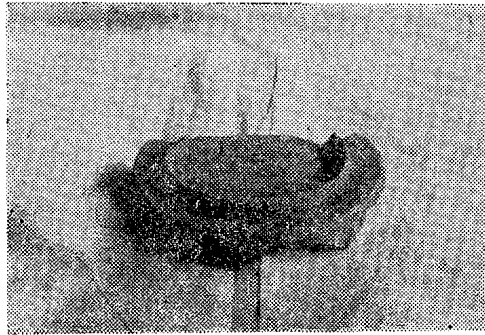
第三圖 七ツ池出土の二彩釉水瓶

括して收められていたのではないかと考えられる厚さ一糎乃至一、五糎に及ぶ須惠器大甕破片數個及び須惠器蓋付杯、埴の破片、土師器杯の破片等があり、又今回の發掘に於ては前記須惠器經筒底部の一部小破片及び内部に黒色漆を塗布した土師器杯破片等が出土した。

以上が本遺蹟發見の出土遺物であり、土製品の外何等發見を見なかつた様である。

遺蹟に對する考察

本遺蹟が如何なる種類の遺蹟であるか、最初圓壽寺を訪問して新國氏のお話しを伺つた折りは、二彩釉水瓶、黒漆塗香爐形瓦器が一ヶ所の松根の下より伴出し、他の須惠器等は附近の地域より出土した如く誤つてお聞した爲、廢寺址の所在するのではないかの疑を持ち、それ等のことを古美術第一八卷第七號誌上に報告したのであるが、其後再び新國氏と面接の折り須惠器經筒底部破片を見せられ、以上の遺物が開墾の際、松根の下より一括して出土した如くに見られるとお話しを伺い、これ等の遺物を開墾中に發掘した島崎菊次氏の談に依れば、大甕の大破片が他の遺物と共に埋没していた様に記憶す



第四圖 七ツ池出土の須惠器經筒破片

ることとであり、以上の遺物が須惠器大甕の中に一括して收められていた様にも考えられる。

斯く考えて見ると本遺蹟は經塚の如きものであつたことが想定され、出土位置は臺斜面下部であり、若し經塚の存在を考えるならばこの臺地の臺頂平坦部にその所在が考えられ、出土位置より一〇米内外の距離の三方を見晴せる臺頂部に所在したことが考えられる。

而してこの臺頂部より、出土位置へ向つて一條の小開析谷があり斜面下部に行くに従い谷の深さが深く、谷の横断面はV字状をなしている。而してこの開析谷には現在有機質黒色土層が充填して居り、遺物は臺斜面下のこのV字谷に於て發掘されたのであり、臺頂の經塚の埋藏物が何等かの機會に封土が崩壊し、須惠器大甕がこのV字谷に轉落、發掘地區に於て大甕が大破し、V字谷の中途にこれ等の遺物が堰をなした爲、臺上より雨水と共に流れる土壤がこのV字谷に堆積、現状の如くなつたのではないかと想像されるのである。以上の想定はとにかくとして以上の遺物の出土状態より見て今回開墾により發掘された位置が一次的埋藏位置でないことと云うことは殆ど誤りなき想定の様に見える。又この附近を舊く普現壇と稱したと云うことも本遺蹟に何等かの關連性のある様にも思われる。

福島縣下に奈良朝以降の廢寺址と思われるものは各所に散在し、各地より礎石遺瓦の發見を聞き、この地方は早くより佛教文化が弘く浸潤したことを明確に物語つて居り、藤原期前後の密教文化に依る經塚の如き遺蹟の所在することは敢て不思議ではない。

筆者は歴史時代遺蹟に就いて、又その資料については殆ど注意を怠つて居り、福島縣下にも相當數の經塚遺蹟の類例があることと思うが、門外漢の筆者は今回の調査の歸途新國氏の御教示により踏査實見した安積郡片平村片平の丘陵上

に所在する三基の小圓墳上の塚より出土した佛教關係遺物により、この小圓墳が經塚的意義を持つものであることを認知した資料以外、梅宮茂氏により報告された信夫山頂の遺蹟等を知るのみである。

猶筆者が新石器時代の遺蹟の地域的調査を實施した石城郡川前村と云う阿武隈山地の山村に於ても經塚と云う小字名を持つ土地があり、或はこの地名の附された地に經塚が存在しているものかとも思つてゐるが、今後の踏査によつて有無を決定すべきであらう。

猶片平の經塚については稿を改めて報告する豫定でゐる。

遺物に對する考察

所謂唐三彩ではないが、唐三彩の技法を持つ綠釉のかかつたこの種の古陶は大津市南滋賀町の大津京址乃至は白鳳時代の寺院址と堆定される遺蹟より四脚付三彩釉盤、黃綠二彩釉皿、及び蓋物、子持壺、水瓶。三彩の合子の破片等、白鳳期の様式を持つ遺瓦と共に發掘されて居り。又正倉院御物中にも同種の坏、皿、鉢、盤、瓶、埴、鼓胴等六六點に及ぶものが所藏されて居り、この外大阪府三島郡阿威出土と稱する二彩壺が益田太郎氏の所藏品中にある程度で、その發見地例は極めて僅少であるが奈良朝前期と確定し得る正倉院又大津京址に保存、發掘されていることは、益田氏の所藏品が一石棺中に副葬されて發見されたと云う事實と共に、このみちのくの僻地に於て發掘された仿製二彩も亦、奈良朝前期、白鳳時代を下ることそう遠くない年代に作られたものと考えられる。又作が稚拙であり或はこの附近の地方窯の作品とも考えられ、今後の奈良朝前期の寺院址、窯址等の大規模なる學術調査により、僅少ではあるが各地の遺蹟に發

見例を求められるものではないかと秘に期待するものである。今日まで仿製三彩、二彩の發見例を殆ど聞知されないのは、かゝる寺院址等の學術的調査が殆ど行われていないことに起因するものと考えられる。

又本遺蹟出土の二彩釉水瓶及び遺蹟の年代が奈良朝前期よりあまり下らぬ時期のものであることを想定せしむる他の資料として、長野縣東筑摩郡宗賀村平出に於ける土師器、須惠器等を出土する原史時代堅穴聚落址より緑釉水瓶等の發見が報ぜられ、又武藏國分寺址よりも緑釉の陶片が出土して居り、又今回七ツ池遺蹟にて發掘された如き内部に黒漆を塗つた土師器杯は、千葉縣木更津市清川遺蹟等よりも相當量出土している事實を列擧することが出來、これ等の資料に依つて七ツ池遺蹟の概略の年代は推察可能であり、これ等の事實よりして本遺蹟が福島縣下に於ける佛教文化の初期の遺蹟であることが考えられ、郡山盆地周邊にも數ヶ所に奈良時代の遺瓦を出土する寺院址があり、奈良朝後期に於てはこの地方の佛教文化が相當隆盛を極めた様にも考えられ、福島縣下郡山盆地附近に於て二彩釉水瓶の發見は敢えて不思議とすることはないもののようにも思われる。

む す び

以上の調査により本遺蹟の出土遺物は一個の須惠器大甕に入れて七ツ池臺上に人爲的に埋藏されたものが、何等かの自然的崩壞により斜面下へ轉落して二次的に埋没したものと考えられ、遺物の中に須惠器の經筒と思われるものが出土していること等より考えて經塚の如きものであつたことが考慮され、その年代は前記考察による諸事實よりして奈良朝前期を下ることそう遠くない年代の如く考えられ、前記片平村片平、信夫山等の佛教關係遺物埋藏遺蹟より古い年代の

ものと考えられ、本遺蹟は福島縣下佛教文化傳播の初期の遺蹟と考えられる。

昭和二十三年一月二十七日稿
昭和二十六年三月二十五日訂正稿了

註(1) 西坂 茂著 信 夫 山

信夫山保勝會
昭和一六年一〇月發行

(2) 小山富士夫著 正倉院三彩

座右寶刊行會
昭和二十二年一月發行

(3) 小山富士夫 平出遺蹟出土の綠釉水瓶

信濃第三卷第二第三合併號
昭和二十六年二月發行

寄贈交換雜誌目錄

史學雜誌 五九ノ一一、一二、六〇ノ一―五	東方學 一	大阪市立大學文學會	立正史學 復刊一	立正大學史學會
史 學 會	文化史學 二	東 方 學 會	東京女子大學論集 一ノ一	東京女子大學學會
史林 三四ノ一、二 史學 研究 會	史觀 三四、三五	文 化 史 學 會	アメリカ研究 一九五〇年七月、十月	東京女子大學學會
史淵 四五、四六 九州 史學 會	經濟學雜誌 二三ノ三一六、二四ノ一―三	早稻田大學史學會	アメリカ學會	
社會經濟史學 一七ノ一、二	西日本史學 三一六	大阪大學經濟研究所	國立臺灣大學「文史哲學報」二	臺灣 大 學
社會經濟史學會	歷史評論 五ノ一、二	西 日 本 史 學 會	國立中央研究院「傳所長紀念特刊」	
西洋史學 八	瀨戶內海 一ノ二	瀨戶內海總合研究會	歷史語言研究所	臺北國立中央研究院
日本西洋史學會	立命館文學 七七	立命館大學人文科學 研 究 所		

郡山市七ツ池の二彩釉出土遺蹟に就いて (江坂輝彌)